平成２９年（2017年）１２月６日（水曜日）　世界日報　The Sekai Nippo

米寿をお祝いし、名城政次郎氏と妻の郁子さん（同婦人会の初代模範母親表彰者）がケーキカットした

模範母親を囲んで記念撮影をした。奥左から４人目が川木アリス会長

「模範お母さん」を表彰しよう

琉球台湾婦人会　台湾の習慣を沖縄でも

PHOTO フォト・ギャラリー GALLERY

家庭や社会を良くする役割を果たしているのは、まぎれもなく母親である。台湾では立派に子育てをしながら社会に貢献した母親を模範女性として表彰する習慣があり、沖縄と台湾の友好の懸け橋となっている琉球台湾婦人会（川木アリス会長）は11月11日、創立21周年記念に合わせて「琉球台湾模範女性表彰祝賀大會」を開催した。今年の模範母親賞は、いけばなインターナショナル沖縄支部長、沖縄県更生保護女性会会長などを務めた又吉博子さん（85）、助産師の許田英子さん（82）、いけばな草月流沖縄県支部長の大城昌子さん（77）、そして、台湾からは桃園市婦女企業管理協会の理事長を務める徐劉淑媓さん（70）が表彰された。

同婦人会は2009年から毎年、沖縄で模範母親表彰式を開催している。初代の表彰者は、学校法人沖縄尚学学園の名城政次郎理事長の妻、郁子さん。今回は同婦人会の川木会長が師として慕っている名城理事長の米寿の祝賀会も合わせて催された。名城氏は台湾生まれ。経営困難になった私立校を立て直すため、1983年に人間性重視の沖縄尚学高校を開校し、全国に知られる文武両道の名門校にした功労者だ。ケーキカットした名城氏は、「社会を明るくする人材をつくらなければいけない」と力説した。

祝賀大会のエンターテインメントでは、沖縄尚学高校の生徒が龍の舞と台湾アミ族の舞踊を演じ、台湾からはコーラス、先住民・苗族のお祝いの踊りが披露された。また、與儀（よぎ）会館総本部による力強い沖縄古武道空手や美しいベリーダンスが会場を盛り上げた。

（文と写真、那覇支局・豊田　剛）

琉球新報　2018年1月17日

論壇

一方的な中国の航路設定

台湾と協議し合意図れ

蘇（そ）　啓誠（けいせい）

1992年合意「一つの中国の原則」を認めず、台湾の主体性を尊重する民進党政権が2016年5月に誕生してから、中国が一方的に台中間における交流窓口を遮断し、台湾への団体観光客を制限し、台湾の外交空間を封鎖することなどにより、双方の関係は急速に冷え込んでいる。そんな中、中国は4日、航空路「M503」の北方向と「W121」～「W123」の3航路の供用を開始した。台湾にとってはまさに寝耳に水であった。

そもそもは15年1月、中国が大陸南東の沿岸と平行する「M503」と、それから東山、福州、厦門にそれぞれ延びる「W121」～「W123」の計4航路を設定し、3月から実施すると公表した。「M503」は台湾海峡の中間線からわずか7・8キロしか離れていない。しかもW系3航路は悪天候の場合、台湾本島と金門島、馬祖島間の飛行に影響を及ぼす恐れがある。中台双方はこれについて協議はしたが、合意には至らなかった。台湾はあくまでも「M503」をより西方（大陸側）にずらし、そして運用する前に引き続き協議して合意を目指すべきだと主張した。

台湾交通部民用航空局は15年3月初め、中国が台湾の要求に大筋合意したと発表した。それを受け3月末、中国は「M503」を西方へ6海里移動し、「M503」は南方への一方航路として供用を開始した。またW系3航路は当分見合わせ、正式合意後に実施するとのことだった。

しかし今月4日、中国は事前通告をしないまま、台湾が合意していない「M503」の北方向とW系3航路の供用を開始したことに対し、厳重に抗議した。中国が取った行動は15年の中台双方の合意に反するばかりでなく、民間航路の名を借りて、実際には台湾に対する政治的、軍事的な企てを隠すものであり、台湾海峡の現状を変更する意図が明白である。

今回中国が協議なしにこれらの航路の供用を開始したことは、国際民間航空機関（ICAO）の規範を守らず、飛行の安全を無視するとともに、協議を尊重しない傲慢（ごうまん）な態度である。中国は関連する飛行活動を即刻停止し、中台双方の意思疎通が図られるよう直ちに協議することを強く要求する。

グローバル化した世界において航行の安全は国際社会が最も重視するものの一つである。今回の中国の一方的な航路設定と供用の実施は、東アジアの航行の安全を脅かすものであり、決して許される行為ではない。日本にもこの事情をよく理解していただき、台湾の立場を支持していただきたく、切にお願いしたい。

（台北駐日経済文化代表処那覇分処長、60歳）

2018・1・20　沖縄タイムス

論壇

台沖関係 飛躍の1年に

友好団体間の交流 深めたい

蘇　啓誠

2回目の沖縄勤務が昨年の12月2日をもって5年目に入る。本職は3年前後で交代というのが通例であることからすると、4年以上というのは異例の長さと言えよう。日本の公務員の場合は、1、2年で異動は当たり前らしく、年頭の賀詞交換会などの場で、顔なじみの方々に出会うと、「あなたは異動はないのか」と案じられる。

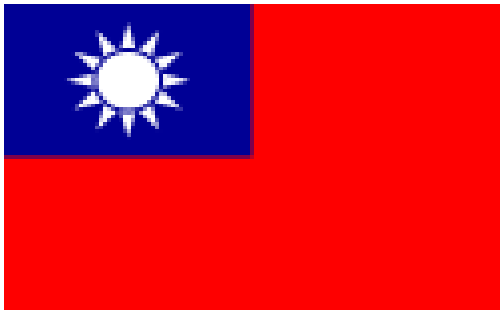
一般の人は口八丁手八丁、黒を白と言いくるめるのが典型的外交官であり、ゴルフ、カラオケ、ダンスが得意な人たちだと考えがちである。実は、私はこれらの例に一つも当てはまらないのである。その代わり、アルコール類は少々いけるほうで、それを武器にして外交官としての任務に努めているが、ビールを飲みすぎて痛風を患う身となっており、心を入れ替え、目下、健康のため、ハイボール、泡盛をたしなんでいる。

もう一つは、台湾と沖縄との交流を推進するに当たり、誠心誠意取り組むことである。昨今、台沖間における各種の交流が盛んで、台湾から沖縄を訪れる観光客は飛躍的に成長し、2016年にはすでに60万人台に乗せた。これは格安航空会社の参入と県の熱心な取り組みによるもので、特に翁長雄志知事が台北で「沖縄ナイトin台湾」を主催し大好評を博したことが、台湾における沖縄の知名度向上につながっていると思われる。

一方、沖縄と指呼の間にある台湾を訪問する沖縄の人は、まだまだ多いとは言えない。台湾は、近来の中台関係の不調により大幅に減少した中国人団体客を埋め合わせるためにも、数多くの県民の訪台を切に願っている。また、自助努力として、昨年9月に那覇市内で観光・物産・グルメを中心とする「台湾フェア」を開催したところ、予想外の大盛況で、県民の心に台湾のありのままの姿を知ってもらうことができたと思っており、今年も開催する予定である。

翁長知事は、常に台湾と沖縄は兄弟のような関係といわれている。新年早々、当事務所には台湾の小学校の管弦楽団、コミュニティー少年野球チームから沖縄との交流に関する問い合わせが続いている。未来の台沖友好の担い手となるこれら若い人たちの交流を大事にするとともに、今年は沖縄との交流のために設立された中琉文化経済協会60周年という節目に当たり、県内からその協会とゆかりのある那覇日台親善協会・中琉協会・華思会・久米崇聖会などが、来る3月6日に開催される祝賀会においでになる。こうした以前からの友好団体の皆さまとの交流もいっそう深め、今年を台沖関係を大きく飛躍する年にしていきたいと願っている。

（那覇市、台北駐日経済文化代表処那覇分処長、59歳）

沖縄タイムス2018/1/20掲載

琉球新報2018/1/17掲載